

流星観測に興味をもてば

大阪 山崎 幸夫

自分の家でありながら、まるで盗人の様に障子の開け閉めを氣にして外へ出た。冷たい夜の空気が膚にふれると1時に緊張する。屋根に區切られた空に銀砂の星がきらめいてゐる。観測地點の廣場へ出る途中も飛ばないかと考へると仰向いて歩く様になる。然し夜中だから好いけれど若し晝間だつたら相當物騒だ。怪我の絶えまがない事だらう。

さていよいよ腰をすえて流星観測を始める。宏遠なこの紫紺の空を破つて、何時、何處に、銀線の流星が出現するか豫測出来ないんだ。空は何も教えてはくれない。見つめてゐる程空の高さを感じ星の光に言葉と思ふ様になる。こうなれば悟入解脱の域だ。が待て、そうと知つた瞬間、ただの素人天文愛好者の1人に還俗してゐるんだ。そして時計を見る少しの間にも飛ばないかと案じて首玉のたるいのを辛棒して忠實な観測を續ける。と又無我の境になる。もうわからない。

釣の好きな友達がある。何時かかるか判からない。釣糸を水面に見つめてゐる時の氣持は1時間でも2時間でも緊張のうちに愉快さがあつて、キユツと合せて釣上げた糸に波紋を残してはねる魚を見た時のうれしさは經驗してこそ其の妙味がわかるのだと云つた。

僕はまだ釣をやつた事がないけれ共流星観測は丁度それと同じ氣持だらうと思ふ。然しそのまま早合點してはいけない。魚の詳細は歸つてからでも調べられるが、流星の場合はその瞬間に總てを見取らなければならない事だ。これの確度が観測の價値を決定するのだ。一寸氣をゆるめた瞬間に飛んだ流星の出現點にまよつてしまふと、折角の観測は素より歸宅してからも惜しくてならない事が度々ある。

英國より日食観測先發隊來る

英國天文學者10人より成る日食観測隊の先發隊3人が去4月23日夜、ブリウ・フォンネル社船 Agamemnon 號に乗つて神戸港外に到着。翌早朝第3突堤 N に横付けとなつた。山本早乙女兩博士と櫻井時雄氏とが之れを出迎えたが、先發隊3人は Stratton 中佐、Bagnold 少佐、Royds 博士であつた。ストラトン、バグノルド兩氏は同日「ツップメ」號で急ぎ東上。ロイツ博士は船のまゝ横濱に向つた。〔花山急報207〕より]